
裸婦スケッチ

織 梨緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裸婦スケッチ

【Nコード】

N60410

【作者名】

幟 梨緒

【あらすじ】

芸術科の高校で、裸婦のスケッチがあつた主人公。

夢中になって描いたスケッチブックを抱いて帰ったのだけでも、下宿のバールでは、なぜだか不機嫌そうな人が一人居た。

（前書き）

今日の芸術の授業は大学からアルバイトの女性が来て、裸婦のスケッチ。

とても綺麗な人で、私は夢中になって描いたのだけど、下宿に帰ってみると・・・。

「ただいまー」

「お帰り。珍しいね。今日はカメラじゃなくて、スケッチブックを大事に抱えてるなんて」

「うん、ミルズさん。今日ね、初めて裸婦をモデルにスケッチをしたの。デフォルメしても良かったんだけど、きれいだなあってモデルさんに見惚れちゃって、どちらかというと、写實的に描いちゃった。見てもらえるかな？」

「どれどれ。ほう。確かにきれいな人だね。セルト、お前も見ないか？」

洗い物をしていたセルトは、少し虫の居所が悪いのか、ずっと黙ってたままだ。何か悪い事したかな？と心当たりを考えたけれども、特に何も思い当たらないし・・・なんて思っていた。

ミルズさんは、スケッチブックを一枚一枚、丁寧にめくっては、街の絵や、ダンテやロダンの絵を見て、なかなかいいアングルだね、だとか言ってくれている。

「セルト・・・」

洗い物が終わったセルトは、黙ったまま、2階に続く階段をあがって行くと、ひどく音を立てて、部屋の戸を閉じてしまった。

「ミルズさん、私、何か悪い事しちゃったのかな」

「どうして？」

「だって、セルト、なんだか怒ってるような感じがして・・・」

「気にしすぎだよ」

ミルズさんは私にスケッチブックを返しながら、少し愉快でたまらないという含み笑いをしていた。

「裸婦って、きれいな絵なのかな・・・」

「さあ。でも、アイツも男だしな」

「？」

「そのうちアイツが何を考えてるのか、すぐにわかるよ」

この兄弟はいつもこうだ。私は何だろう？と思うことを、すぐにはぐらかす。でも、悪気があつての事じゃないっていうのはわかってるし、私は一つ大きく肩で息をつくとき、自分の部屋に帰った。

その日の夜、セルトが私の部屋をたずねてきた。

「入ってもいいか？」

「どうぞ」

いつもだつたら、部屋の入り口で要件を話すセルトだけでも、珍しく部屋で話しがしたい理由があるのだろう。というのも、廊下で話す、ミルズさんにも話し声が聞こえてしまう。何か叱られるのかな、と、緊張したけれども、セルトは不機嫌というよりは、何か考えこんでいるようだった。

「・・・大学に行ったら、裸婦のアルバイトがあるのか？」

「みたいだね」

「そうか・・・」

「おまえは・・・そういうアルバイトの依頼が来たら、受けるのか？」

「あは、私には来ないよ。もちろん、希望を出せば出来るアルバイトかもしれないけど」

「俺のわがままだが・・・そのアルバイトは・・・してもらいたくない」

「？」

「いや、俺のわがままだ」

「ああ！セルト！プレイメイトになるわけじゃないし、ただ、じつとしてるだけなんだよ！変な事はないから」

「いや違うんだ・・・」

なんだろう……。確かに、クリムトなんて、裸婦を相手に、デッサンしたり絵を描くだけじゃなくて、関係を持ったって伝記では読んだけど、それを心配しているのかなとも思ったのに、違うらしい。

「俺のわがままだ……。何でもない、明日も早いんだろう、お休み」
もしかして……。と思った私は、待って！と声をかけると、背中を向けたセルトにおでこをつけて、ちよつと恥ずかしかったけれども、思いきってきいてみた。

「もしかして……。他の人に私の裸を……。見られたくない？」

「……」

「はは……。私、何言ってるんだろうね」

しどろもどろになりかけた私の方に向き直ると、セルトは私を抱き締めて、小さく、

「当たり前」

そうつぶやいた。

「セルト……。セルトの心配するような事は、私、しないよ」

「いや……。俺のわがままだって言っただろう？」

「ううん……。わがままじゃ……。ない」

この調子じゃ、男性の裸婦スケッチの授業があつたら、セルトは妬いちゃうんだろつな。ふとそんな考えが頭をよぎって、私は小さく笑ってしまった。

「なっ・・・」

「ごめん。何でもないよ」

「おまえを束縛するつもりは無いんだが・・・すまない」

「あやまることないよ！だって、セルトが・・・」

そこまで私の事を思ってくれてる、そう思える事は、嬉しかった。

「セルト、今度一緒に美術館に行かない？」

「・・・ああ」

そういえば、私は、ミルズさんとセルトの写真を見た事がない。記念撮影もいけれども、今度は、二人の姿を絵にしてみよう。

それにしても、裸婦のアルバイトなんて考えてもみなかったな。そう思った時、一瞬、学校をうろろしているシーンバインの軽薄な顔が脳裏をよぎった。

いやだ！あんなヤツに私の裸婦姿を絵でも見られるのは耐えられない。セルトがわがままだつて言ってくれなかったら、気づかなかつた・・・。「セルトに感謝しなくちゃね」と思った私はほつとしたのか、そのまま安らかな気持で眠りに落ちた。

その日の夜も、静かにふけていった。

（後書き）

ゲーム・プレイヤーの皆さんの好きな名前とイメージを想像して、読み進めて下さると良いかな、と思って主人公は一人称「私」です。何かを表現する、というのは難しいなあと読み返すほど感じます。最後まで、読んで下さって、ありがとうございます。

感想・評価だけでなく、留学編ではどのキャラクターが好きなのか、投票があるといいのになあ・・・と思うこの頃です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6041o/>

裸婦スケッチ

2010年12月10日20時35分発行